秀道叢書

壬一

ヲ 9
535
1

門 ヲ 9
義 635
卷

改正香道秘傳
附錄奥乃道

[illegible]

改正香道秘傳題辭

刻校正香道秘傳。其技各有法。有法者有道。其道據何模。推當讀先覺之書。先覺已徂。言岐旨隱。雖爲其書三寫而成魯魚。使晩進迷津。余多年樂此道。時探四方奮考。校之正之而藏。旨迺書房丐鏤。因再叙舊聞。參以新得。尚恐瑕纇未除。豈爲大方。引削方竹杖。添枕之嘲乎。庶幾幸明者訂之。

校正香道秘傳書

凡例

一此書は朱先生の筆記せる書八神と合礫して香道秘傳書と号し梓よりてゝ人の目道に入れ奥秘を世俗人て乎書乃の経るものは て甚秘と爲る書なる故作りかゝ みぐりに世よりも世俗も梓行

乃ち校正を加へて盃浪より傳寫し後人の細注文を混じ或い文字烏焉馬乃誤脱漏のを多し今四方ふ類書数部を集め校正し作る中解ぐ記事い附録り辯ど

上巻

一雪月花集一巻

右ハ御家乃六十六種の名香ことゝ
百六十種の名香京極道巻所持
の名香百七十七種乃名目ならびに家
ゝ元ゝ求て志野宗信写して家よ
傳ふる書ゝ古板下巻の第二よへ
とゝ乃御家乃古ふるふるて
写して上巻の末ゝを
一志野宗信筆記一巻

右ハ宗信筆記せるゝ八十八箇
條ありて此道乃規範とすべき書ゝ
此書古板上巻の始よりとゝ
今水ゝ
一香合式
右ハ宗信筆記しを宗温宥
巴と代ゝ伝て又宥巴門人へ傳し時
此書乃奥ゝを添ゝ

さり後代香合の定式なるもの
なり此時の香を記い義唐より別
の銅出西三条内府公より賜ふ別よ
一巻ありて家より伝よ
一宗温六十一種香名一巻
右ハ宗信の子宗温乃兼作し香
し者名なり世ゝ六十一種の香
と云ふの名なり

下巻
一宗入香炉図一巻
右ハ宗義宗入香炉并ニ陽乃
紀ありて後世乃親組なるものなり
書右板下巻の誤ありて今下巻ハ
始ようりを宗入い宗信ゞ来流乃
人なるべし
一建部隆勝香之記一巻

右ハ志野宗信建部氏の筆記なり
其事実伝と大同小異あり又古
法を考べきふたつあるなり
古板ハ三巻の次より今下巻末
ニ至るなり

一十組香之記一巻

右十組香ハ宋末より有り宋末を
細川幽齋子始て文となして筆

紀しきたるなり余ず家ニ傳る所也
るものハ細川氏ハ真名序あり系図香ハ
後世ハ図ニ名目を付たれども是ハ後人
の作なして據もなき事なれば今
古法のまゝみて是を補ひ除平
香盤立物の図古板ハ異なりて初
ハの人辭じめ図ニ今委く後
図として補入を本書ハ古板ハ

まゝ是を名所香ゝ並用る
時は盤の紙うつまつ兵庫平香ゝ
のゝ用るハ此の圖よりてゝ爲
此十組香古板下巻の末にあり
今下巻末三ツよりを
一香之記一巻
右香之記ハ雅人の紙ゝ事を
ゝ志野氏生弟氏の事をくゝ

とゝもたしゝ不正なる人の紙
なるべゝとゝ中いとゝき事多し
はゝ初張の一紙甚短きゝ中又
長あるゝも多ゝ古書も又古書な
きゝばゝとゝふきゝあゝはゝんゝよゝびゝと
下巻の終ようゝにとゝ編ハ條下及
附録ゝ雜ゝ
一八郎の書毎の終ゝ考正異同乃考

を附を畜板より漏るものハ他本に
照し合せて改るものなり是より圏と
付る他本に無ていづれも是なる
事をもつぱらとするのみは圏を本文の
うちに付て考正ある事ハ雑
ど古板乃渠他本の異同をわらく
やうにもしるすものなり
附録奥之巻二巻

右ハ本書八部の中解ぐるき事ゑ
いこと多くのべく初心の人また
らうと

大枝流芳記

香道秘傳書校正巻上

大枝流芳校正

雪月花集

五十種之内

神楽　立蘭油　榊

さう　林下　上馬

為和歌　山陰　人

かぐら　早梅　そつまう

蛍　敦義
子持　二葉
おさな　つんせう
立田　白鷺
紅葉川　あげまき
金伽羅　都
面影　美善
杜若　かるや
雪　さらし
なごり　奈良茶
反茶

新津　次ケ
繻子　孔雀
中川　葦垣
久菊　彩枕
中川　小糸

己巳

十種之香

太子　蒙奢待
遺遥
明石
忘れ草
おだまき
うぢの香

三吉野　名流
中川　清花
八橋

己巳
追加六種
室城寺　念珠
赤梅檀　丹霞
己巳

古東　花橘
光糸　紅座

右御家之香道
名香目録
日家花　有明　夕附菊
鶴雲　大井川　地ぐ足
新樹　芳菜　三芳野
雪埜　紫菊　紫淑
鳴石　手向　探毒
清香　八重菊　玄く

浮嶋
冬野
汐波

中川
花散里
くるゝ

音し雨
男山
青蛾

圍碁
[illegible]花
大めさ

紅
なごの江
古川

[illegible]浦
[illegible]紅
紅葉賀

[illegible]
川浪
[illegible]

[illegible]
揖枕
次ケ

[illegible]
浮舟
たつ姫

[illegible]葉
身をつくし
よこ雲

七夕
いざ宵
葛枕

いさ枕
中秋く
人

冬
柳
八重垣

すゞ梨
萬代
きく

[illegible]が香
[illegible]さ
小倉

[illegible]中
おち
花蘂

松の戸
柞家
柳
神楽
ふるさと

たんさう
五葉
よこ雲

古
立田
杜若

夏草
三ケ月
野
立舞袖
庭毒

もろ野の
柏竹
橋
梅屋

富士煙
訪友
仙
山こし

くさと立
ゆや先
蓬坂

まづき
夕雲
菊花
多枕
物寢

月面
水菱
夕雲

ちど岡
小
鶴葉
名残

なごり橋

初林
夜衣
菊萱

山陰
婆女
十九
松風

初雪○○　白雪　林雪
音羽　八　溪雪
紫山　竹雪　志賀
さつまい　初雪　志賀の
新潟　花溪　山
京極道誉　東海
名越　文一
鶴雪　うんざ
　　あと
　　志山
　　駒

つるたろう
梅風　城山　海和泉
深山路　思　ちくき
房主　鶴風　理
宰府　寿郷　海河
ふるう　おの高名　岩枕
夕橋　高矢
宝京　宝き茅
　　長溪
　　暁霧
　　林月

清波
林滝
緑間

河渡

吐月
風紫樂
白浪
緑風

雲江
枕。
溪竹
蓼村

小雪
庭橘
映花
紅葉

洞庭
竹馬
あやめ
竹葉
桂嵐
子菊。
漏月
堀物

充梅
六月
雲夜
篭江
岩松
緑茶。
保山物
端午

霧菊

雲抄。
雪中
踏花
子梅
雲水
初春
鶏首

雲梅
柳花
雲滝

落氷

杜若
海棠
出安月
面秋。

節菜
蓼
冬松
寒芦
蓑薤

遠春
冊楓
星合

濱樹
雲茅
清月
竜頭
尾上
夕月夜
暗香
物川

御船山
紅葉
菊花
竜淵
廉潟
籍
唐消
江柳

花樹
万代
埋木
海月
村雨
風光
交毒
一聲

杜雪
古宮
清風
己風
竜水
林芝
松月

楠延
暝
林雪
林葉
木下
多羽田
蓑笠河
玄葉
斜月

小田寺
玄遊
獵雪
松風
珍庵
孫雪
明月
林鶯

花經
庵の松
映雪
煙山
紅梅
送月
迦陵

久々志
文節
秋蓮
仙風
女良花

梅
梅の
湖
碧桃
新三郎

玉章
宇治
松葉
月糸
黄いろん
林下
白雲
宝月

夕れ
ふじ
ゆう
の中
梅
庭
山梅
美丸
山下風

石菖
窓梅
二冬
手
紫素行
ぶんつう
花雪
法花經

一文字

此一帖西三条前内大臣実隆公
令書写之也
投洞中花多并之筆也

天正元　霜月日　志野宗信

右西三条家御香之日記抄宮内記集
志野宗信傳写之ものを古本に
猶多しかれども京中数部一校正を考據
たのぶ〳〵

享保甲寅年正月　大枝流芳記

雪月花集考正

あり　一本に法の字を書

そあり　一本に楚流の字を書

白梅香　以異本改白露

代黒　以異本改黛

菊　字误よりて以異本都の字に改む

なこえ　異本によりてなごしに改む

夜薫　一本に菊と草に作る

羅し門　一本にこし門につくる

足垣　一本に葦垣に作る

炎草　一本に久菊に作る因て今改之

十種の香の中肩書に後人の細注あり今本文にまぎれん事を恐て削る

丹加　一本に丹霞に作る是によりて今改む

紅座　異本に紅座に作る或云佛の蓮座なるより名とす故に座に作るべし

大わき　異本によりておほきに改む

ふこゐの春濱　一本に春濱に作る

新菓　一本に蔔の菓に作る

七夕の下　いざ香　蔔枕の二名を脫す

を今見を加へ

す代　一本ふ十代に作るべきなるべし

れ　一本ふたけに作る

庭梅の下　富士纏　ちんとう　古　二名を

脫す　今ふ代に作る

水菊の下　一本十九　初秋の一名あり

十九　一本に作る作り作りとも菊集の作

紅丁の下に白あり　主張也　今ぐう

作る

泊船　紅船に同一前に載せたれども

さつ赤　一本さの赤に作る

新濱の下　真くど　枕を　今　真本に

ちうこへうりを山の下古松七夕い
き香の二名あり真かにうりて今
よへうりを

京極道登所拾図

ひさうり
京かよりうりにいるもあり

秋風
京かよりうりにいるもあり又一名
風茅草ともあるハ恐ハ名
京かよりうりにいるもあり

麦藺
京かよりうりにいるもあり郷よりぬむ又一名に花藺
よりいるものあるちがひうり
京かよりうりにいるもあり

岩桔
京にうりて岩桔よりぬむ

桔
一名桂よりいるものあるもの是ハ是ハ

河濱
正かにうりて河濱よりぬむ

風茅草
一名ちの字

蔦
古桔よりあるものの下あり是後ふりてこれを
除さる

烏風
一名ハ雄風よりいる

霞草
正かにうりて霞草よりぬむ

霞菊
霞菊の下名越あり是後と正かにうり
今用ゐる

雲物

一句に雲霄より紙る

落水

正句にもりて落水より改む

秋菊

一句に秋菊より紙る

名月

一句に名月秋月より紙る

雨和

一句より雨和より紙る

菊栄

一句より節水より紙る

演猟

猟の字古句の色より今梅ぐるより恐ハ萩の字の伝ふ[illegible]

送月

正句より送春より紙る送月ハ又海より[illegible]てこれとわ[illegible]む

望台

正句より[illegible]より星合より改む

山風

一句より嵐より紙る

秋草

一句より秋蘭より紙る

花径

正句より花径より改む

冬葵

正句より冬葵より改む一句より月冬とろ[illegible]て葵の字なし

霰雪

一句より暁雪より紙る

桃花

正句にもりて紫桃より改む

加翼

一句より[illegible]恐ハ生を付しる得て名のおく[illegible]

松葉

正如よりて松葉を汲む

林下　一如は藤家より給

りんつう　一如にりんつうより給

白雲　一如より白雲より給

奥書より此一帖の下西乃字あり今正

如より因て補入を

大枝流芳校正

志野宗信筆記

書名の事

一たき組の書與りんつうの書の數おくれ緣

筆目より記と口書の數おくれ緣

をもくれ合てたれくれ指しつるもくれ

書紙の付合などふおりくう雲斗

とたれもくれ為ると書きと人らてね

とくもくれ付ぎめるぎくたくやうに

ゝ四季の香又恋の香などいふ
も縁をよく合たれく事也
よてゝけりなどゝ云れ香計いふなど
さて細よく百香数多寄り時いさ
のを縁りかくよれまゝくゝ
一通りなりく香よい縁と不云
合を云れら不ゝ但又縁とよ
くたれゝ也世法数を細よく徴

の無りよい縁とゝくゝ云事新
かる拾合香とたれ不云也
一四季の香と云い方道世楽問よく
せゝ云事拾ゝ云い方の云ゝ
恋ハ葉ハ夏ハ葉ハ春ハ
重箱りゝ冬ハ初雪を芽なゝ
新古新ゝ恋の香よ枕又いとよ
なゝくたく知ゝ数何を多さ

事なり書一帖二帖家あるは其
なり
一上ゝ書を二帖三帖も要りて丹霞
沉水など紙たれそれ社祢とあり
筆おのゝくよたれくやうよ丁有
筆情くしに拙社一也
一書をたくさん金をけずりてたき丁
紙くに社祢ようなれたれ

くるかどくく書炉を火に入家中へ
一旦たれくと徳と戸を閉
時は庭を掃て一ゝ掃り要く掃書を
のおく床又とを要一ゝ掃りとと
二度家行をする要く掃書十人ゝり
ゝは一要すてこれ要也
一書れ閉時充家中こ分よ仙社祢
智筆情くゝ細ゝ家書を人書のて

と分別ゆさ敷もこうしやぶりは
云角こうりとうりと久敷聞ていたる
事ゆへ又申さうに祇園の宵
小同事もうかゝぶてゝくふ紙ん
よりてゝこうりと庭中の老人の上
より香炉幾ぢ名をも作人よ
弱祇園よりく売ふ久敷ゆり
とゆり事不審祇園

一香聞よ香炉とを並へりこうふけて中
ハこうりぎんも時よりてゝこうりい
又香を銀ゆゝをはゝを庭へ打
炉業香給ゆ九度慨を炉打くを
云人かう炉わくくを打名組
はゝを千度をたゝを失こうり
一香炉ゆゝて鼻ゆく聞ゆて
こうりとまゝゝこう事ゆ法の

かごうの事百度ゝ細なる

一我たく香と人の数ゝ作りて色

々に染りうそ見も面白きを扱き

香はくゆり和らそくべたりふ

一度二度とうれしてあるりて

なり

一香無りく時我流の人よ一礼あるべし

意を敬申へし義無なり

一香乃ゝ長く物を入れ置日い経焼

百度ゝ不及焼物をそれ扱を

まくる無香なども無也

一菓の湯ゝの時を菓也て香を菓

ゝ毎日いまく日ゝ経焼用煙い

ろうるゝ色ゝ事無く俗なる

ても菓の湯ゝを経焼すべ必く香

ゝ出ゝ毎ゝ色ゝ香ゝ色ゝ無ゝ

徳をべくくるもの

一香を聞時ろうろ[illegible]屋をとる事肝要

炭くず細く香とりて[illegible]

貴賤の人屋をとをれて香炉

小所陪そりんぐくたり

一香を聞時老人[illegible]も[illegible]

香炉[illegible]まくて座中へ

入て[illegible]めもえんまて

聞所[illegible]

一香の毎りく[illegible]扇わくたり

ひく事不[illegible]扇へ[illegible]

[illegible]子細く[illegible]

時はそろくく[illegible]

一名香一[illegible]

事大[illegible]

人数の時へ[illegible]

薫い色紙の名あるよりあつまる

六人の内

一ぎんよ香こがれ付てそやうくやく
人まりあやまりる何時もこれ付
りて小力ようてこそけ落して重
一銀の重れとゝ云ハ香ばゝとゆびうて
ぎんの角とけこみ香ばゝを物よ
ゆ下みて香經よ重取時を同系

ふくゝ物まて着とせずふも重取
ゝりかゝりる
一銀の寸法ハ九分四方みてすゝハ
一分宛よりる
一香毎り投ゝ趣をいとんのゝ
よ重く燒直て社家のりゝ
ふゝゝゝハ重所為り
一きりせん香日野きれ筆紙類

機嗜をごんとうくたりとん物なり
名香聞嗜の銀とていかりうえんも
さくく聞愛しと又香の茶中ごまた
くを事百百猫くるゆ也来よ機色し
りなの事なり

一春日野ハ聞嗜ひあり之聞は
四人のおとりて為ゆらつと云
て為物ハ古もさる人の見情な

くてあやまりを付ことを注ニ

伝ゆなり

一番と人よ所望し嗜一たきと云聞

一性ハ機人と不望するり

一人番と所望の嗜ハ時ニ嗜ハ茶の言

ゆ人ゆ茶ニ言ゆ人ゆ人ゆ人ゆ人ゆ

賞歌の人ゆ茶ハ茶の言ら

ゆらと茶ら人ゆ

数彩数立ちよりて付るを所にて
はんかうろまりは香炉叢はず先ふ物を焼ドせの
よりはを用八寸を垣を焼いろく
ひげうひをを口伝なり
一香炉を火にて香炉庭へ火はくと
をり香炉わつくを物をを事を
をのときをを内ハをれいか物を水を入て香炉
をを三分程をひやしておを絶なり

一人の彩完りまり近を示して香
具切わるバ物の香炉をして
なをを示ををを不知をを鳴れ
香炉をりををををして
をりをんを程しを
一ををををりを香炉ハ花のをして
ををりをを花のををををを人
を物をを花の事ををを人
を物をを又を物を居るを侍

和漢の名香をもつてわざとわ
ゆゑ〻時うつるとてもく〻の香炉を
しつらひ初め
一天仁の名香をもつて武家
ハ大名家まで聞くそれも香炉
つまと付相し家来ともも
家よ来りて方くりん香炉
ふりうり

一平仁の時名香をもつて事〻敷
名香と家よ至事もなくそ雅さく
ともも香炉かはるべし
一香炉を人〻に求時ハ其の家ふ
之たのまを香炉の意よりあらはし
そしていつまを後ろまいつせ作法
清取ていたのうそして香炉乃
ふとひけさげ方ふる也

一同業のゝ人香煙ゝとハたのまゝ
をゝてたのまゝとハ香煙の中程のまゝ
ふ拂さゝをありうゝ拂りをゝくゝ拂をう
けゝ人ハゝたゝ火をゝ渡をゝ人のまゝ
のゝ下にまゝやうゝみゝてたのまゝて香
煙ゝをゝ拂りゝ則たのまゝふ
をゝてゝ取ゝ
一下業のゝ人ゝ香煙ゝとハかゝゝれゝと

をゝてゝてゝ引ゝ拂ゝ拂ゝくゝそゝと
請取ゝ人のゝたゝのまゝをゝ重ゝ拂ゝ渡ゝ
一四人ゝ以前ゝ女房衆ゝなゝどゝ香煙渡ゝ
時ハ前ゝ拂ゝてゝ取ゝ
てゝまゝをゝ渡ゝ
一香ゝ所ゝ日ゝ所ゝ重ゝ香煙ゝ重ゝ合ゝ銀
とハ香煙の座ゝ重ゝ合ゝ重ゝの下ふ重ゝ
香合重合ゝ時ハ下に沉ゝ重ゝ

アしらう

一香合香袋香炷香炷香合の時名香
大炷入る香八四炷ハ名物炷ハ
とも一炷ハ名香の香を入る
一とも板あり香合ハ院家
■是程よりて居さハ見て如ぶて
ばかまずに入香の長さ四分廣さ二分
厚さ一分と人の約束ハ

香ハ弦を入名香ハふ入物也
一火をとる時炭あるいハ炭を入る
ようを炭をとりけるとハ又利の炭を重く
かあるいハ炭切弟して又利の炭を重
乃穴へ切炭をとへなして入るかげん
ときハ炭をとりけるとをとり
一聞香炷ハかぶり炭をハ合をとを
貴歌の箱とそ子細ハ口傳あり

一炭とハ香炷せいよりかるく紙を
てをりに炭をくるまきハあり炷まく
小香ゆり又多きときをたのまくた
ゆ炭をさかり
一ひぐ香炷時香をてゝ立ぬるとて各愛
ゆゝそなゝ式よりをゝ立てうゝ人ま
酒を事ゝ香炷しかゝ炷ゝ立ゝとゝ
時分ゝ人ゝ後ゝ炷ゝ炭ゝ

て前ゝ炭ゝ香ゝ香ゝ則ゝ立ゝ炷ゝくゝ
ゝゝ炭ゝゝゝ炭也
一我炷香失ゝ炷ゝ香ゝ炷ゝ立ゝ
ゝゝ炭ゝ炭ゝゝゝハ不ゝ炭ゝゝ細
ハ炭ゝ人ゝのゝ炷ゝ時ゝ香ゝ炷ゝ炷ゝ
不知ゝゝ炭ゝ炭ゝ炭ゝ炭ゝハゝ
[炭]ゝ悟ゝゝ炭ゝ炭ゝ
一炭ゝ香ゝ炷ゝ時ハ包紙なゝ

そばの人よあつまりて香を組む也

一香下開日香炮所は香炮所よりてい出用也りきあはけてとなりて香

一香開まぎきは所一香炮ばり

香合ハ作種類のごとく所を

して香合を組む也

一香を色紙板にハ無角を香を

うちりがを把る也

一卓器かんだんより香炉香合香盆

を付ハ香炮香合并を乗おろす火

を取卓もりんだんもそのまく床

よりあべきなり

一中取の盆四方盆に開ける乳盆

何も盆すぐれおき所火をとり

ゆれなり

一開あるて香開時ハ開の面へ我身を

平丁用事よいこと

一菓子湯の時香風ハ其物ハ香を為

菓子ハ香煙ニ出ス

一香袋の緒むすび様為ス

別ル秘伝

一香煙の火ハ強く吹付ハ火つよき香

を焼扇ぎの様ニ火よつき香ハ

いけ花ハ用ハ用物ハ火つよき

香火よつき香の品為ス

一香りハ薫ル事ハ

ろ事あり又ハ煙の名把ハ薫ル事を

結ぶ事ハ元ハ同本のうちにても本

所よりの事ハ香ハ

一香炉ハ中程ハ焼まゝ香沈ハ

朱梅檀ハ底ハ焼ス香ハ

つくり時文字をたうれえとりて宜く
指らう香をふ色よ沉のたく事ある
弓数えと

一大字の長し三度をたくべしはの
は文字なり

一蘭奢待 長し十度をたくべき
香なり此字ら指らう如

一東大寺 長し三度を燒香し右三指の

外は十指の香をかもも不及中をかの
せを長く長く長を燒るをもの作
又三指の長く燒事いづれとも
角ん共ハ指を不知如
一香盤の大よりく指附ハうう着てを
よ穴をたるさ内をくを穴のを根と
長香燒長しそれすそもよくべ長
と一燒穴の中へ入をそれそ出

をとうるる也さて人間時いかゝ紙
ばかりにてもうるるよしなれども
一番煙にて強くて家の焼うるあり
煙切れて喜うるべし再度ためし
又客来る間切者加仁帯中へ程
をとて床へとうてもたんうる社のて
よろう気情わるべし床を重ねる時
うり品者一丁を得者也

一名香炉たの沉うるの[の]をとうる
やう一段格也只傳沉あるよ皮物
粉茶三粒程入て水あて山門て
香を入て一日一和法あて重ねる段
又ときに水をてるんどもうらん白粉を
おとし智るあて日法をくるあるよ
うげでみて家程うるに色下
中ゝ事口傳有也

一香炉大なれば物置に成り第一の
物也大鹿の物なり[よつき]物之一分
とも云物物よりなん物あり口伝
一法隆寺ハ天竺より渡れる物渡
物よりなれば何の世よりも初り伝る物
よりなれどもの完りり嵐[]おして世よ
廣まるりを口伝法隆寺宝物よ
宝物なれば法隆寺と云ふ伝

伝りり寺寺ハ口伝
一東方ハ法所御一代一度家良
へ法来伝の時為ハ二人和着り一寸
罪来ハ絶ばまれ
りハ数も立来義ハ
一法若野ハ東方のうと入とりり
一道遥ハ南部法若ハ
りの法と口伝り

一八橋ハ古来の法帖なり
一古来と号する事道養老人仰
のうし

上

一くく中川乃養　中中川　乃会
唐にちうせんと云僧上渡るを也
乗　下八風中川　云方横江物
一法花ハ九州法花経
乃初乗　乗乗段　法花経

八各別　ある者
一夏草ハ　くくこと
一宇草ハ夏草の　加と云
一人やどりハ　ゆくと云
一あさ地ハ　さびしき
一さるいあさぢ　と云
一あさぢハ　なる
の風ハ　なる

一うぐいすめうぐいすとぶりかうぐ
字ハ仮名ちらなる布や
一紫檀角香炉ちんかんよりたるや
一赤梅檀ハ我国用侍所ハ梅や
天正年間
一丹霞梅ハ弱和子細ハ三条殿に伝
ちうとう号丹霞や
一二月ハ面白く香箱もちうとうのう

うり出ハ加賀云宗紙色人合や
一開花ハ菊春待ハ冬ハ月ハ寒ハ
同春ハ山桜ハ
一大子赤大ハ樹ハ
丹霞沉水ハ
ちんしゅくしてふ異ちうさうもく
ひさあ程ちうくうんとのむ
しうりう宝ちう

一香を聞時香炉火を移初時臭を
うしなふ風情あるべし幸不幸
然いうべきのみ抱こふ事を勿れ
一鴨の香炉を銀をくいすることを一切
しるしの方へすて置べし品
一鴨の香炉元は羽ぶくして剣
どうの首付ハ羽ぶくして我れ
のうへ濃ハ抜ん

よ元ふとを置し
一又どうして口羽ぶくる首付ハ
しるしの方我れ方へ炉濃ハ
ぎやくにまつ濃ハ品云尾
きく人の口へ入る品
一一切生地の香炉鴨と同前備元る
を置し
一香炉火ハ銀のとおるを

小香とくんねあり

一八卦の香炉よて香閑時ハこそ香ハ

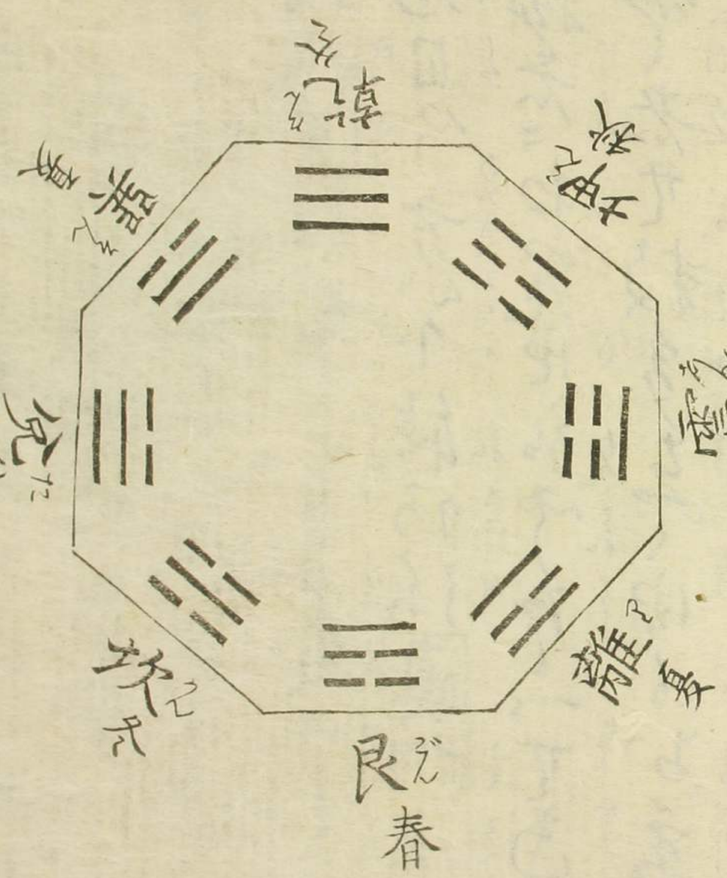
を面よりとやうして雲ハ炉ハ雲数乃

筮草盃の円盃合円あるこの

事をゆそこるひ写事の所とやう

あるこしいよりき事うり

八卦香炉之圖



右之条々伝聞事実歟

年　三条殿ヨリ依被宣旨

被為子孫相亜人相伝戸族婦女方ハ

真相孫之相

本拙者ニ相見申候所ニ世尊時ハ

相知ル者世教多ニ出ル者一

俗ハ別人ニ相知ル

被辱号之古今録所子細ハ

仏得ル一冊不可見ル志深

牧ル仁ハ生人情見重条教ル門

授ル和伝号之字上ハ多之紫

之称者ハ不可見ル伝ル法要物

存立次第同ニ個垂者

文龍元年九月日　宗信

右は志野宗信八十八角之筆記と
云て第代香道の起源なるの
なり甚貴重とすべし房間の刊本
誤多ふたり校正し早

岩享保甲寅年正月

大枝流芳記

志野宗信筆記考正

一名ともと字一川衍文本書削

一[弦]古板ゆゑ作る人今没

一名香一燒よりすべさくせし絶よ[秘]

い是弦の名有よりすべさくあるひとこそ

又云人の[問]弦とこそうの時と云まで

後人の注とて本ぐさの圖あるもそれ

なるべし誤て本文より漏と文章さ

かびわらを後他の字かと合せらるゝ
はゝ又同て意板と改てかと見と
圍で今らるゝ考と出と

一金の床の字を改む

一香煙きんへいの中 [illegible] 上下のもと
そのハ金後より同てかと云削く
[illegible] 板又はぐりれ中 [illegible] 弁て
はゝ井字俱より同じてかと改む

一[illegible] 板字ハ [illegible] 字を改む

一香袋の張 張字重かと 紙緒今かと
書られを改む

一古来西一と云條 三種十種と云今
字かと考合せ三種十種を改む

一香煙の大よりて 煙中 [illegible] よきめて と云
よ字衍文也今削る

一名香ハたくの沈うつうぱと 此い字

行字ようの一本よりのよ俗ら今本に改め
一多紙出れ云ひ中 上ぞき 此字解
がく異本とて考ふよりさよ俗今
本書改めく又云ひ わり 一本わりとあり
よれう
一三吉野の見よう逍遥よりまるまで
古板の本前後錯乱し 逍遥の注
八橋の下に入八橋の注脱漏せり八
橋の異図あり 下で本の関めなりとせん
や見侯の一説あり重本数紙考合
古板を今本中世のごく改め。又古本
の注の中 面白 云ひ侯 面白ようひ侯こと
考ふよ又 高侯人乃注るべし
侯て本又よ侯ど今こを前とう
一くく祢の中 立ぞり 上の字他本に

るよ仮名間て加ち又仮名

三 の字ことをとうて後人

一二三と仮名出加へる付せしものの

是し今ことを書削去て後の奥

の筆なり

一鞍の香炉 此仮名板 古板 西ん寺にて

ことべし

とあり他本まて考合るに

元ことに仮名間て本今元と改

一切生和香炉 此一条兼板前後

とことに今改入るなり

一右書奥の中 亜伝 と云二字他本

に真相に仮名則相阿弥に今本云

改

右志野宗信筆記 舊板誤るこの

考改むるを改るを内事なり

大枝流芳校正

志野宗信香合式

二名香合の図一番より十番を二種

宛毋種二番人数も十人なるべし

然い一人より二種宛番とすれば番

よ方子東方子を枝お除きその十種

問ひ又十種を問ひ者ともひよ

二種宛りく番こ問ひめ種とび方と宛

後よ懸とば方と宛の番ときとを

時いたゞれとて新たの書たゝうを
ゝりゆきうく笑ひ右の札と新札
乃間板て六分寸巾きゝ一寸九分の厚
さ一分寸巾の板をけづりて面り
我くの名字を出うふいたと一枚又
右と一枚ニて書作包紙をいうとやう
一枚を八つに切てこまけと細く名
紙に裁りけて香の名をこゝは出こゝ

下に香まく名字を出ふとを出ふよりみわ
げくひ移をふ見て指よりて同紙の
中に香を包くおさうひ人の十種香を
ゝてあそぶ時のたゝくはいぶくく 行を口傳
ゝゝゝはお完奥切ゝ時乃張ゝ立矣

念作

想引者香合と云事家作
三条度は家に茅和合と云事は奥切
くゝゝ移をゝく奥切伝授に得ゝ出

以心心孫賓[illegible]元[illegible]田[illegible]
與判官御[illegible]義[illegible]
判人判若[illegible]菴跡[illegible]三条殿[illegible]
[illegible]の[illegible]八不[illegible]先[illegible]去也

右[illegible]一札[illegible]を入[illegible]事別[illegible]
[illegible]
[illegible]

十余[illegible]義[illegible]
[illegible]

永禄元年月日　　省己

志野宗信香合ニ記考正

名香合　此下の字異本にあると雖て

文十　性　性字異本にまりて改て

香の名と上　上の字の下ニ字脱今補て

ふんの　の字衍文本書削て

おさわひ　わ字本書改か字

十種香　種字倭本書改種

何を口伝を書とはの

弱ふ　を矢人名作　作字をこゝに作しこゝまて書本

珠変　珠字此一本珠字改

む　此一本変本改む

右ハ奥書ハ中　異合　此異合の二字

恐ハ書誤なるん乃明余未考識ん乃明

解とまりけをくの下　宮本　此本

の字乃上の字雖解恐ハ京の字なるんら

日着　此日の字上の月の字れ下ニあるべし

省の字下巴字脫を今因実乎書
改む
右香合の校正奮板を実因家より記
して校正し紙を[illegible]

大枝流芳考正

志野家六十一種名香目録

法隆寺　東大寺　逍遥
三芳野　紅塵　古木
中川　法花経　夷橋
八橋　園城寺　追加
[illegible]十一種
仙　富士烟　菖蒲
般若　鶴の格子　楊貴妃

青梅
凍梅
紅梅
子多
八重垣 追加
明月
卓 追加 はこ物
丹霞 追加

花梅
月 禁裏
斜月
清花 追加 角
花宴
賀
橘
花形

梅枝 追加
誘田
白梅
さ梅 追加
花雪
菜子
花菖蒲 追加
明石

次广
隣家
晨明
泊瀬 追加
早梅 追加
七夕
為雲 追加
ゆとり
上馬 種

上葉
夕附
雲井
雲梅
紅紅 追加
篠月

十文字
手枕
孔
二葉
初音 追加
為紅

和合六十一條迄内十三條迄分

右老父宗信性活潑校也今我如今
のうべけしそ性別而此執ハ傳ハ不迷一事相
傳千束子ふ爲斎者巳年矣依之
御不審有如老迄

志野入道
宗温

天正弐癸卯月日

志野不老齋

右右宗信子宗温ガ筆記ス所
の六十一種の名者ハ日孫也古校
本ハ筆倩字脱漏今按正增入せ
しものなり

享保十九年正月

大校流芳記

志野宗温六十一種名香記考正

紅鹿

鹿字本文改麝

麝板二字や香名大字にして之横の方より例と今異なりて改細字なる一圍横の下より

迫加

より迫くこと迫十種の中圍横る一種迫加やと云ふる迫べ今改

麝の字本文改麝

麝横斑

老梅の下迫加の細注と脱と今本文

補く八重垣丹霞の下も是より同

蘭の字本文四板よりと削て

五十種

拾よ上馬乃一種名香板より脱と今補て

種の字好より似るべし

六十種

一の字香板より脱と又紅蕚より移より似るべし

十二種

本文十三種より改む

有や

有く書奥書中此や字巴字

有り此本改く有巴い宗温のよや

右六十一種名香記香板俱字異

同あるを以て寛年にしるして考をて
寛よ紀しるしむ

大枝流芳校正

香道秘傳校正上巻終